

一主婦からの新発田市政通

皆様これで良いですか

発行者 青木三枝子（市政を考える会）

新発田市御幸町 3-1-21

TEL 0254-26-8334

27号

平成 26 年 8 月 27 日 第 27 号

1 露の玉垣を読んで

駅前複合施設の図書館問題を通して知り合った方から乙川優三郎、新潮社、「露の玉垣」という本を紹介され、図書館から借りて読みました。この本は、家臣、溝口半左衛門家 7 代目の溝口半兵衛長裕によって書かれた新発田藩の家臣の譜「世臣譜」を元にしています。この「世臣譜」は、当初は露の玉垣と題されていたとの事で、乙川氏はそれを本の題名として使ったそうです。本を読み、新発田藩の歴史に思いをはせると共に、家臣たちが、洪水、凶作、火災にみまわれ窮乏する藩を守る為に如何に苦心してきたのかを知ることができました。その中の「静かな川」という章には、岡島新右衛門という勘定奉行御金方兼役が、水害後の築堤資金の無かった藩の為に、その家の関孫六という名刀を差し出したという話があります。その話の裏にある、家臣として、武士として、そして人としてのありようが描かれていました。その家臣の思いは、新発田藩士の三男として生まれた坪川洵平氏にも受け継がれ、私財を投じ新発田市の為に図書館を寄贈された事へと繋がったのではないかと思います。

本の中に、二ノ丸、三ノ丸、外ヶ輪等の地名が度々出てきます。二ノ丸、三ノ丸は藩政を中心的に司る家老等の屋敷があった場所といわれています。また、外ヶ輪は藩士の屋敷があった場所との事で、坪川氏生誕の場所です。このような場所であったからこそ、坪川氏が図書館を寄贈され、晩年を過ごされたのではないかと思います。今の市政にも、歴史あるこれらの場所を駐車場で埋め尽くすような事をせず、新発田市民が誇りのもてる場所にして欲しいと思います。

新発田藩の武士の家系に代々伝わるという言葉がありました。常に来年は凶作のつもりで用意しておけ、万が一のときに備えて米塩を貯えよ、一生の半分は自分のため、残り半分は年貢だと思って人のために働け、等です。付け加えると、代々お城に米を調達していた商人の家系の知人は、お母さんから「新発田藩家臣の生活は苦しく、生活の足しにする為に竹でぼんぼりや金魚の提灯を作った」という事を言い伝えとして聞かされていたそうです。事実か否かは不明ですが、それ程に家臣の生活は苦しかったようです。そのような貧しい藩にも関わらず、何故、新発田藩主溝口家が 12 代も続いたのか、それは家臣、領民が共に藩主を信頼し、生活困窮に耐え、苦難を乗り越えて来たからなのかもしれません。今を生きる我々も、こうありたいものです。是非、皆様もこの本を読んでみて下さい。

2 まちを歩き古い建物をみつけましょう。

知人に、新道に古い家屋が残っていると聞いて探し訪ねました。通信を配る時に新道をよく歩くのですが、奥まったところにあるこの家屋には気付きませんでした。道路側は食堂になっているのか、メニューの絵が板に画かれていました。食堂にも興味ありますが、奥の古い家屋に魅せられました。後日、その食堂を訪ね、こころのこもった釜飯を頂きました。使いこまれ黒光りする重厚なカウンターも座卓も素敵でした。今度は奥の家屋を見せて頂く予定です。

辺りを眺めていると、向こう側から歩いて来られる買い物帰りのご婦人に会いました。いつも眺めていた古民家、洋食屋さんの方で

した。初対面の私を屋敷の中に入れて下さり部屋を見せて下さいました。中庭を囲むようにして二つの和室があり、和室を繋ぐ廊下は一部が土間になっていて、その中央には飛び石の様に丸太を薄く切った板がはめ込まれていました。和室でも食事できるとの事です。ここでも後日、店の看板メニューのタンシチューを頂きました。

数日後、再びこの辺りを歩き、すき焼きの店の古い建物を眺めていると、通信を配る際に知りあった方に出会いました。その方は、その店を訪ねて来られたようで、店のご主人に話し、私に中を見せて下さいました。家具、建具、床板、天井や階段の造りは歴史を感じさせるものでした。いつか、この店のすき焼きを食べたいと思っています。

中央商店街に古くからある時計店のご主人に、店の奥を見せて頂く機会がありました。中庭のある、京都の細長い町屋造りの生活空間がそこにありました。長い廊下を涼しい風が吹き抜ける心地よい空間でした。店には年代物の時計が多くあります。時計と共に、この町屋造りの建物を残し多くの方に見て欲しいと思いました。

火事で古い建物が消失してしまった新発田市にも、昭和 10 年代の貴重な建物がまだ残っています。皆様、まちを歩いて見つけてみませんか。そして、住んでいらっしゃる方と話してみして下さい。

3 古い建物を保存し次世代に繋げるまちづくり

上記に述べたような古い建物を維持し生活する為には、家主の方の大変なご苦労があると思います。これらの貴重な建物を次世代に繋ぎ、多くの市民や観光客に見て貰い、少しでも賑わいを取り戻すには何が必要なのでしょう。歴史ある古い建物の良さを残しつつ、耐火性や耐震性の向上などの安全面や住み易さが加味された、恒久的に人が住めるような建物にし、残す為の対策が求められていると思います。早急に対策を立て実行しなければ貴重な建物が消えてしまいます。

提案として、まず、行政の方に、くまなくまちを歩いて頂きたいと思います。市民の有志を募るのも良いですね。これはという家屋を見つけたら、家主の方の考えをよく聞いた上で、専門家に評価してもらいます。残すに値すると評価された家屋のリフォーム費用は、行政が援助します。また、固定資産税を優遇するのも良いですね。家主の方に住んで貰うのが理想的ですが、その古民家に住む方が将来的にいなければ、市が窓口になり住人を募集する方法もあります。行政の援助を受けた古民家は見学者を受け入れます。見学者から見学料金を頂き、その料金は住人に入るようにしてはどうでしょう。知恵を出し合えば良い考えが出て来ると思います。要は貴重な古い建物を残し、次世代に繋げ、人が住み、人が歩くまちにする事です。これ以上、駐車場ばかりの人の住まないまちにしたいありません。